写真は語る

長野市公文書館資料

長 野 市 公 文 書 館

はじめに

長野市公文書館が、公文書館所蔵の資料や『長野市誌』を中心に、長野市域の歴史を市民に分かりやすく記述した「探究ながの史」の連載を『長野市民新聞』に開始したのは、平成23年のことでした。その後、「写真は語る」「公文書館資料が語る戦後70年」「公文書館資料で振り返る市町村の歩みと暮らし」と、続けてきました。

長野市域の歴史に対する理解を広く市民共通のものにしていくためには、新聞連載だけではどうしても限界があります。地域の歩みをより一層身近な出来事として受け止めていただけるよう、今回これらの記事をホームページに掲載することとしました。

「公文書館資料が語る戦後70年」に続き、第2弾として「写真は語る」（平成26年5月3日~27年5月30日掲載）を掲載します。長野市公文書館が所蔵する写真をもとに、長野市の歩みや市民の生活、市を襲った災害などの様子について記述したものです。多くの市民の方に読んでいただけることを願っています。

No.	タ イ ト ル 名	執筆専門主事	掲 載 年 月 日	頁
1	116 年前若松町に開庁 -市政を見守った歴代の長野市庁舎-	松島 耕二	2014 年 5 月 3 日	4
2	改修で発展の基盤に -拡張前の中央通り 市街の狭さに苦しむ-	宮原 秀世	2014 年 5 月 17 日	6
3	「三幸座」道路に濁流 -明治の湯福川出水 善光寺周辺を襲う-	西澤 安彦	2014 年 6 月 7 日	8
4	露座の仁王像 故郷へ -明治 45 年の御開帳 飯山の仏師が制作-	松島 耕二	2014 年 6 月 21 日	10
5	戸隠から上水道敷設 -電動巻き上げ機で材料や砂利を運搬-	宮原 秀世	2014 年 7 月 5 日	12
6	2尺玉で名をはせる -晩秋の夜空を彩るえびす講 名煙火師-	松島 耕二	2014 年 7 月 19 日	14
7	長野駅近く中御所に -県立工業学校が開校-	西澤 安彦	2014 年 8 月 2 日	16
8	篠ノ井駅で救護活動 -関東大震災により避難者が乗り継ぎ-	宮原 秀世	2014 年 8 月 23 日	18
9	橋上に群集が群がる -篠ノ井橋の架橋と渡り初め-	西澤 安彦	2014 年 9 月 6 日	20
10	野球やスケート盛ん -上空から撮影 城山公園一帯-	西澤 安彦	2014 年 9 月 20 日	22
11	プール開き 大勢見物 -長野市営水泳場が山王小西側に完成-	宮原 秀世	2014 年 10 月 18 日	24
12	上空から模擬弾投下 -市民を動員し初の防空演習-	関 秀延	2014 年 11 月 1日	26
13	渡り初め見物一万人 -両側に歩道つきで丹波島橋竣工-	松島 耕二	2014 年 11 月 15 日	28
14	失業対策かねて建設 -狐池上松線(展望道路)-	宮原 秀世	2014 年 12 月 20 日	30
15	来賓や生徒が壇囲む -市町村をあげて戦没者の葬儀-	西澤 安彦	2015 年 1 月 3 日	32

No.	タ　イ　ト　ル　名	執筆専門主事	掲載年月日	頁
16	初代は善光寺から移転 -如是姫像の誕生と変遷-	西澤　安彦	2015年 1月17日	34
17	地蔵盆の日まで続く -善光寺境内の盆踊り大会-	関　秀延	2015年 2月 7日	36
18	商店街も参加し飾る -月遅れの8月に市内で七夕祭り-	関　秀延	2015年 2月21日	38
19	10ヵ村と新長野市に -合併祝う児童生徒の旗行列-	松島　耕二	2015年 3月 7日	40
20	ネオン輝く街に繁栄 -商業の中心・権堂 町の成立と変遷-	西澤　安彦	2015年 3月21日	42
21	雲上殿と地附山結ぶ -県下初の営業ロープウェイ-	松島　耕二	2015年 4月 4日	44
22	地形生かし城郭型に -大峰山展望台(大峰城)を建築-	関　秀延	2015年 4月18日	46
23	土砂30万立方メートル流出 -松代群発地震で牧内地区が地滑り-	関　秀延	2015年 5月 2日	48
24	冬季スポーツ拠点に -飯綱高原スキー場開き-	宮原　秀世	2015年 5月16日	50
25	堤防決壊や内水氾濫 -台風や豪雨で繰り返し災害-	関　秀延	2015年 5月30日	52

※本稿は長野市民新聞連載「写真は語る　長野市公文書館資料」〔2014年(平成26年)5月3日～2015年(平成27年)5月30日）〕を、ホームページ掲載にあたり一部加筆・修正を加えたものです。
　なお、本稿のホームページ掲載にあたって、御協力いただきました長野市民新聞社様にお礼申し上げます。

1　116 年前若松町に開庁

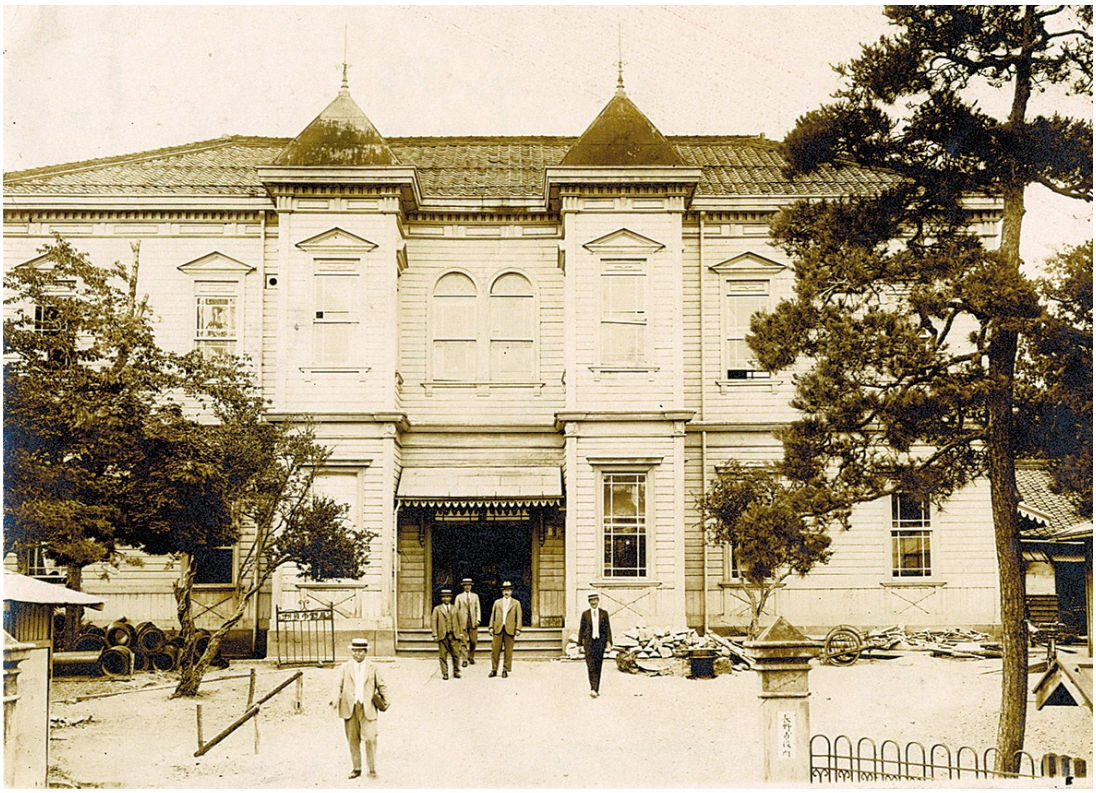
－市政を見守った歴代の長野市庁舎－

現在、長野市役所第一庁舎と長野市民会館の建て替え工事が進められています。3 代目となる新しい庁舎は緑や景観、ユニバーサルデザインなどに配慮したモダンで明るい建物（設計・槇文彦氏）になる予定で、平成 27 年 3 月の完成を目指しています。

初代の市庁舎が造られたのは今から 116 年前の明治 31 年（1898）のことでした。その前年、市制施行により県下で初めて「市」となった長野市が、手狭になった町役場を新築移転したのが市庁舎の始まりです。所在地は若松町で、師範学校（現信大教育学部）や長野県庁の東側にありました。当時の若松町はこのほかにも上水内郡役所や付属小学校、活版所などがあり、官公署や文教機関の中心地でした。

写真は開庁当初の市庁舎です。正面玄関の前に集まっている背広姿の男性たちは当時の職員でしょうか。まだ珍しい洋風建築木造 2 階建ての建物は遠く丹波島橋からもその姿を望むことができたといわれています。緑町に移転するまでの 67 年間、明治・大正そして昭和の高度経済成長期まで市政を見守り続けました。数回の増改築で当初の姿はとどめていませんでしたが、その役目を終えてからは「長野市青少年の家」として昭和 59 年（1984）まで活用されたので、ご記憶にある方も多いと思います。

昭和 40 年 10 月に完成した２代目の市庁舎は、早稲田大学教授（当時）で川中島出身の建築家・十代田三郎の設計によるもので、将来の人口増を見越し、30 万都市の市政を想定して建設されました。地下２階、地上８階（一部 11 階）建ての庁舎は、まだ高いビルも少なかった当時、ランドマーク的な存在だったことでしょう。１、２階に戸籍・住民登録・水道などの市民サービス機能を集約し、窓口行政の充実を図ったのもこの建物の特徴の一つでした。約 50 年にわたり親しまれてきたこの市民窓口は、3 代目になっても同じように２階フロアに引き継がれていきます。



若松町に建設された竣工直後の初代長野市庁舎（明治 31 年 10 月）

緑町に移転新築された 2 代目庁舎（昭和 40 年 10 月）

2 改修で発展の基盤に

－拡張前の中央通り 市街の狭さに苦しむ－

大正時代に長野市が近代都市として大きく発展する基盤がつくられました。その一つが中央道路の改修です。

南石堂町から善光寺仁王門下までの街路は、ほぼ直線の広い道路となっています。これは大正 13 年（1924）に中央道路工事で拡幅された街路です。中央道路とは、その道路工事のときにつけられた名称で、それまでは単に大通りとか町名の通りで呼ばれていました。

中央通り沿いは、古くから善光寺の門前町として大門町・後町・問御所町・新田町・石堂町・末広町というように徐々に町が発展してきました。そのため写真を見てもわかるように道幅は大変狭く、旧後町島ノ寮付近は荷車が２台並行して通れず、祭りなどで人が集まると身動きもできないようなことがありました。最も広い大門町では 5 間半（約 10m）あるものの、後町ではわずか２間半（約 4.5m）しかなかったのです。

この道路の改修によって発見されたことですが、善光寺本堂に至るこの付近一帯の丘地に、何の計画もなく無造作に市街を築いた証拠として、後町から新田あたりを掘り返したとき道路に使用した大石が不規則に並んでいたり、坂のような所があったりして、雑然たるいにしえの跡をとどめていました。

善光寺の御開帳などに全国から何十万という信者が集い、市街の狭さに長いあいだ苦しんできた関係町民は事あるごとに、たとえどのぐらいでもよいから、もし広まるものなら広めたいものだと口々に訴えていました。しかし、見渡す限り隙間なく並んでいる市街地を切り取って道路を広げるなどということは到底不可能だとして一笑に付されたのです。大正８年、沿道の有力者が会合を開いて「道路を拡張しなければ、商家だけでなく長野市の発展は望めない」として、牧野市長に道路改修の促進を陳情しました。これが導火線となり、いよいよ道路拡幅の実現に向けて動き始めたのです。

中央通り(上後町)に建てられた日露戦争兵士凱旋門(明治 38 年)

拡張前の中央通り(明治末)

3 「三幸座」道路に濁流

ー明治の湯福川出水 善光寺周辺を襲うー

明治 44 年（1911）8 月 3 日から降り始めた雨は、4 日になっても降りやみませんでした。午後 11 時ごろからは雷鳴をともなって雨足はいっそう強くなり、大峰山と葛山の間を流れる湯福川の水量が急速に増しました。

住民の心配が現実となり、崩落して川をせき止めていた土石は、一気に押し出して上流の塩沢から横沢町、善光寺北から東之門町、横町、東町、岩石町を次々と襲い、濁流は権堂町、三輪田町との境を流れる鐘鋳（かない）川に流れ込みました。鐘鋳川より南側の地域は辛うじて水害の難を逃れることができました。

暗闇の中で甚大な被害が発生していました。塩沢鉱泉の浴室は瞬く間に流され、死人が出ました。湯福神社では押し流された家が衝突して鳥居が二つに裂け、境内には巨石が散乱しました。さらに、城山小学校の暗きょ（地下水路）の入り口は流木でふさがれ、激流は東之門町の通りを流れ下り多くの家々が浸水し、武井神社近くでは水深が 1m余に達したほどでした。

当時の長野市役所は、この生々しい災害の様子を記録写真に残しています。掲載した写真もそのうちの 1 枚で、写っている建物は善光寺の北東の角、道を挟んだ北側にあった劇場の三幸座（みゆきざ）です。

善光寺側には高い土手が築かれていたため、川からあふれ出た濁流は道路や公園側を流れました。洪水から一夜明けた 5 日の光景でしょうか。泥水がまだ残り、枝や石が堆積した道路に、着物姿の子どもたちが三々五々様子を見に出てきています。後年の昭和 15 年（1940）10 月、湯福川から獅子沢川へ分水用のトンネルが完成し、湯福川の洪水の危険性が少なくなりました。

三幸座の前身は善光寺境内の鐘楼近くにあった見せ物小屋の常磐井座です。明治天皇行幸のときに城山の高台に通じる道が開かれ、架けられた橋が「みゆき橋」と呼ばれ、その橋の近くへ明治 19 年ごろに移転して「三幸座」と名乗りました。大正 4 年（1915）7 月には、当時人気が高かった芸術座の松井須磨子（松代町出身）が主演する「サロメ」などが公演され、本格的な近代演劇が長野にも登場したのです。

濁流に浸かった「三幸座」前の道路の光景（明治 44 年 8 月）

4 露座の仁王像 故郷へ

－明治 45 年の御開帳 飯山の仏師が制作－

現在、善光寺仁王門に安置されている仁王像は高村光雲・米原雲海の師弟合作によるもので、仁王門落慶の翌大正８年（1919）９月に開眼法要が営まれました。光雲らによって仁王像が制作されたのは、明治 24 年（1891）の火災で仁王門とともに焼失したためです。

明治 24 年６月２日、上西之門町の商家の物置から失火。瞬く間に善光寺門前一帯に燃え広がりました。ひと月余り前にも火事があり、この２度にわたる火災は「長野の大火」として語り継がれるほど大きな被害をもたらします。６月の火災で焼失した建物は 500 棟以上に上り、仁王門のほかに大本願や院坊の大半、寛慶寺の寛喜庵なども焼け落ちました。

仁王門は弘化４年（1847）の善光寺地震の際にも焼失しており、慶応元年（1865）にようやく再建されたばかりでしたが、またもや焼け落ちてしまったのです。間近に迫っていた明治 27 年の御開帳では仁王像もない仮の門を急場でこしらえて当座をしのぎました。ようやく再建に着手したのは大正３年。その４年後に竣工し、大正７年の御開帳で落慶式を執り行っています。

一方、仁王像は明治 45 年の御開帳のときに「露座の仁王像」が置かれました。これは飯山の仏師・清水和助が請け負って制作したもので、和助は職工数十人とともに既存の仏像をわずか１カ月で修繕し造り上げたといいます。像の丈は１丈３尺５寸（約４ｍ）で、木像の上に和紙を貼り、表面に黒色の漆を塗ったものでした。お顔がことのほか大きく、見上げるとさぞ迫力があったことでしょう。

御開帳後は公園地に移して保存する計画でしたが、仁王門の再建工事が始まると、門近くの端に横倒しに放置されていたといいます。新しい仁王像が完成すると、鶴賀田町の普済寺を経て信更町安庭の真龍寺本堂に長く安置されていましたが、最近、飯山市が譲り受け、和助の故郷に１世紀ぶりに戻りました。傷みのひどかった下部の修理や漆を塗り直すなどの修復を施したのち、現在は「寺のまち飯山」のシンボルとして JR 飯山駅前公園に建てられた仁王門に安置されています。

明治 45 年に善光寺御開帳時に置かれた露座の仁王像

JR飯山駅前の仁王門と故郷に戻った仁王（阿形）像（筆者撮影）

5　戸隠から上水道敷設

－電動巻き上げ機で材料や砂利を運搬－

飲料水の確保に苦しんできた長野町（明治 30 年市制施行）は明治初年から明治 10 年代にかけて、潅漑（かんがい）と飲み水を兼ねて戸隠から瑪瑙堰（めのうせぎ）を引く用水事業に力を尽くしましたが、実ることなく終わりました。ようやく大正２年（1913）３月 14 日に上水道の工事実施の認可がおり、水源を戸隠の瑪瑙沢に求め、３月 30 日に起工式を往生地の浄水場予定敷地で行いました。

工事は全域を①戸隠工区～貯水池工事および導水管布設工事の一部、②芋井工区～導水管布設工事、③長野工区～浄水場工事、④千歳町工場～配水管布設工事の 4 区域に分けて進められました。

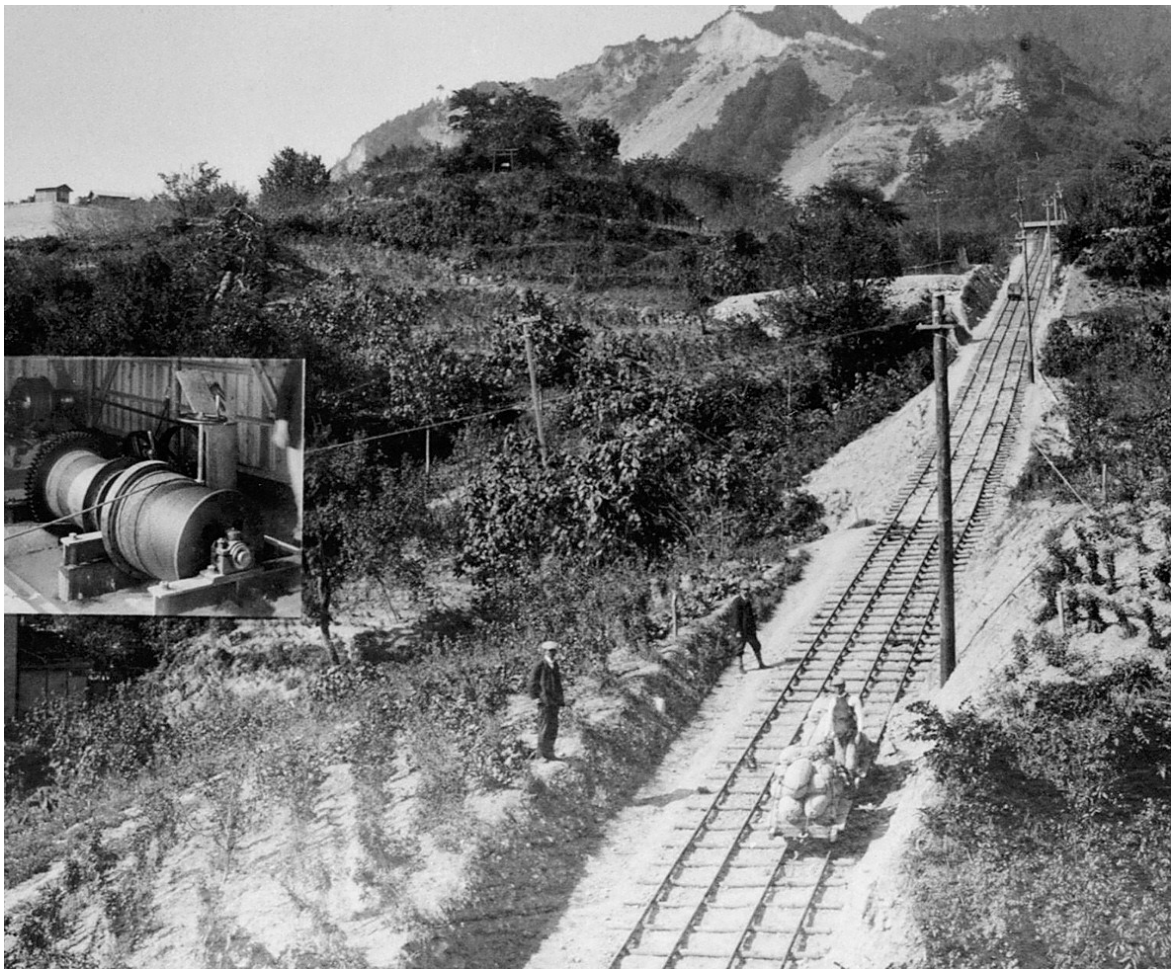
工事は各所で困難を極めました。導水管布設工事は延長 4 里余（約 16km）でしたから戸隠、芋井、長野の３区に分割して行われました。長野と芋井地区の赤渋間はほぼ戸隠里道に沿って布設しました。ただし荒安～笹峰間は最も急勾配の地に延長 270 間余（約 486m）の導水路を新設しました。これが竣工後、俗に水道坂と呼ばれる場所です。

この工事では 15 馬力電動巻き上げ機を据え付けて諸材料の運搬をしました。赤渋と戸隠の間はほとんどが飯縄山の裾野で比較的穏やかな勾配でしたが、林間や原野を切り開いての工事でした。

戸隠と長野との交通運送機関は駄馬によるほかなく、千歳町工場で製造したコンクリート管や鉄鋼管は、戸隠里道を一部改修して二輪馬車で狭く曲がりくねった急勾配の道を運搬しました。

往生地の浄水場工事も市街地から 200 余尺（約 60m）の高地で道路も険悪のため、材料運搬には延長 200 余間（約 360m）を開削して道路をつくり、写真にあるように頂上に 15 馬力電動巻き上げ機や 10 馬力モーターを据え付け、狐池材料置き場から濾過（ろか）用砂利や工事諸材料を運搬しました。

こうして、大正４年４月１日に給水が開始され、11 月 24 日に竣工式を往生地浄水場で行いました。6 年４カ月の年月と 85 万円の工費が費やされて、市民生活の安定と市発展の基盤がつくられました。



上水道工事で往生地貯水場への電動巻き上げ機による砂利運搬（大正 2 年）

6　2尺玉で名

－晩秋の夜空を彩るえびす講　名煙火師－

「花火」といえば夏の風物詩ですが、長野では晩秋の澄みきった夜空を彩る「長野えびす講煙火大会」が何といってもなじみの深い花火大会でしょう。西宮神社（岩石町）の祭礼（えびす講）で初めて花火が打ち上げられたのは明治32年（1899）のこと。第二次世界大戦で一度中断されたこともありましたが、今年（平成26年）で109回を数える歴史のある花火大会です。

長野はもともと煙火の製造や打ち上げの盛んな土地でしたが、今日のえびす講煙火大会の基礎をつくったのは大正時代、煙火大会の主催者として陣頭に立った長野商業会議所専務理事の鷲澤平六でした。

鷲澤は地元煙火師の育成や、その活動を大いに支援し、煙火大会のみならず長野の煙火産業の発展に力を注ぎます。特に当時最大級の大玉だった２尺玉（直径約60cm、20号玉）の打ち上げにも熱心で、自費を投じて「春雷筒」と命名した鋼鉄製の打ち上げ筒を製作するほどでした。それに応えるように藤原善九郎や西沢長蔵、藤原彰、青木儀作といった地元煙火師も切磋琢磨（せっさたくま）し技を競い合い、長野の花火、煙火師は全国にその名をはせるようになったのです。

写真は、昭和12年（1837）に開催された「長野商工祭」を記録した写真集の中の１枚です。解説には、

「奉納商工煙火に従事した煙火師と巨弾春雷筒新調前に使用したる二尺と尺の筒。
右より鈴木元義、青木儀作、藤原彰。長野には往昔より煙火の打揚げ行はれ、大正三年頃より更に進歩発達し、大正五年十一月二十日二尺玉打上げに成功す、後二尺玉打上鋼鉄製春雷筒を鋳造、長野市恵比寿講大煙火としてその名は内外に挙ぐ」

とあり、高さ５mはあろうかという巨大な２尺玉打ち上げ木製筒を背景に、２尺玉を囲んで長野を代表する３人の名煙火師が肩を並べています。

そしてもう１枚の写真は、火薬の炸裂（さくれつ）に耐えられるよう筒の強度を増すために束ねた竹の箍（たが）をはめている作業風景で、大正時代の初めに撮影されたものです。

2 尺玉花火の打ち上げに使われた大筒と名煙火師たち
（昭和 12 年、長野商工祭）

打ち上げ筒の製作風景（大正初年）

長野えびす講煙火大会の打ち上げ花火
（平成 25 年 11 月 23 日、犀川河川敷）

7　長野駅近く中御所に

－県立工業学校が開校－

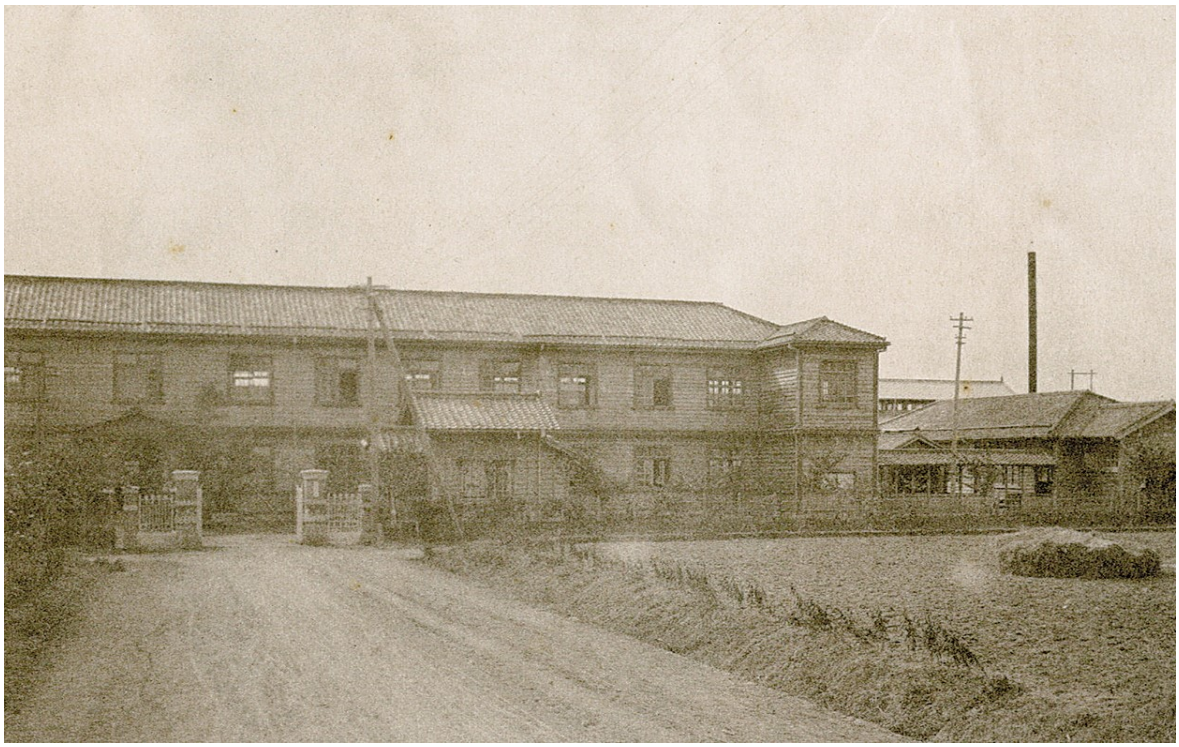
明治時代の長野県の中等工業教育は、染織・漆器・裁縫などの技芸教育が中心で、重化学工業と結びついた工業学校の設置は遅れていました。大正３年（1914）に第一次世界大戦が始まると、県下の産業界や県民の間に工業学校設立の気運が次第に高まっていきました。長野県は、このような県民世論の動向も受け、大正５年になると工業学校設置に向けて、文部省との打ち合わせや関東北越地区の工業学校を視察の上、11 月の県会に設立案を提出しました。

県は設立の理由に、①時代の趨勢（すうせい）、②工業界の人材育成、③地方産業の改善発達などを挙げ、また設置学科は、現代文明は機械と化学の力によることが大きいので、機械電気科・応用化学科に定めた、と説明しています。

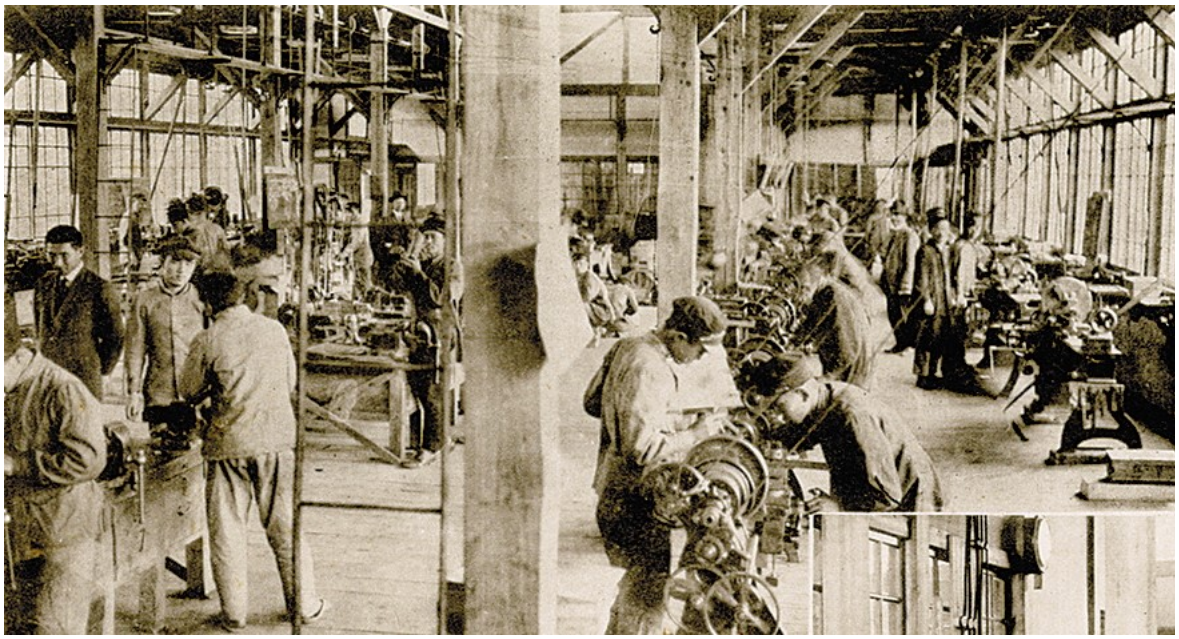
工業学校設立案は県会の議論を経て 12 月 11 日に通過しました。学校の設置場所は当初、長野市西長野が有力でしたが、土地の高低差が大きかったため、上水内郡芹田村中御所（長野市中御所）に決定しました（長野バスターミナル・八十二銀行本店敷地）。長野市に隣接し、長野駅にも近く交通の便がよかったからです。敷地は長野市が田畑約 9,800 坪を買収し、整地して県へ寄付しました。

大正６年８月に文部省の認可が下り、９月に学則や開校期日などを発表しました。修業年限４年、定員 220 人（機械電気科 30 人・応用化学科 25 人）、校名は長野県立工業学校（９年４月に長野県長野工業学校と改称）、志願者は満 14 歳以上の男子、７年４月１日開校などとされました。修業年限は通常３年でしたが１年長く、中等工業教育界では西の都島（大阪、尋常科卒・修業年限６年）、東の長工と並び称されました。

４月１日の入学試験には募集人員 55 人に対し、県下全域から 224 人の志願者があり、結局増員して 76 人（機械電気科 50 人・応用化学科 26 人）を合格としました。難関の入試を３人が突破した塩崎村（篠ノ井塩崎）では村を挙げて祝福しています。大正８年１月、新聞は「機械室の煙突から煙を吹いて全部の機械が運転」すれば、さぞかし壮観で「長野市の一名物になるだろう」と報じています。校舎落成式は大正 10 年 11 月に行われ、建築費・機械設備費 36 万円余の大工事でした。



大正 7 年 4 月開校の長野県立工業学校（後の県長野工業学校）。
校舎落成は同 10 年 11 月（「落成記念写真帳」より）



長野工業学校の機械工場（大正 10 年 11 月）

8　篠ノ井駅で救護活動

－関東大震災により避難者が乗り継ぎ－

大正 12 年（1923）の 9 月 1 日午前 11 時 58 分、相模湾中央を震源とするマグニチュード 7.9 の巨大地震が起こりました。関東全域と静岡・山梨にこの地震による火災の被害があり、全体で焼失戸数 44 万 7,128 戸、死者 9 万 9,331 人、罹災（りさい）人口は 340 万人余りに達しました（震災予防調査会報告）。

東京・横浜には働き口を求めて多数の地方出身者が居住していましたが、故郷や親戚・知り合いなどを求めて地震直後から被災地を離れ始めました。しかし逃れる手段となる鉄道が不通という困難が待ち構えていました。東海道・中央両線は全く不通のため、関西方面に避難するには信越線を利用して篠ノ井経由で向かうほかなく、そのため乗り継ぎ駅であった篠ノ井駅には２日夜半より避難者を満載する列車が到着しました。

篠ノ井町内堀組青年会有志は、とりあえずお茶の接待や炊き出しを開始しました。４日には県からも出張し、郡役所・篠ノ井町青年会・更級郡連合青年会・在郷軍人更級郡分会などはそれぞれ部署を定め救護にあたりました。また町役場は丸屋に救護事務所を設け、駅前に天幕を張り救護に従事しました。さらに郡医師会は傷病者救護所を駅の貨物置き場の一部に設け、尾澤組などが宿泊所の準備などを行いました。

更級郡役所は９月４日から篠ノ井駅で下車した救護避難者の統計を取り始めました。この統計は笹子トンネル内の崩落が復旧し、中央線が開通して更科郡役所による篠ノ井駅救護所が閉鎖された 17 日まで続けられました。14 日間の乗客数は５万 7,448 人、そのうち宿泊した人は 2,476 人、医療救護を受けた傷病者は 1,016 人に上りました。各線の乗り継ぎ駅では避難者が押し寄せることが十分予測されたため、受け入れ態勢について県の内務部から次のような具体的な指示が出されていました。

一　主ナル停車場ニ救護所ヲ設ケルコト

二　救護所ハ郡（市）町村ニ於テ之ヲ直営スルカ若クハ特志団体有志等ヲシテ之ヲ設ケシムルコト

三　救護ニハ簡易ナル救護材料、炊キ出シ、茶湯等ノ準備ヲナシ置クコト

四　係員ハ避難者ノ相談相手トナリ懇切ニ世話スルコト

五　左記様式ノ避難者名簿ヲ作製シ、列車到着毎ニ各車内ニ適宜数冊ヲ配布シ、避難者ヲシテ各自記入セシメ若クハ係員之ヲ記入スルコト

軽井沢駅と上諏訪駅の避難者名簿が残されていますが、残念ながら篠ノ井駅の名簿は残されていません。

篠ノ井駅での避難者の宿泊案内

9 橋上に群集が群がる

－篠ノ井橋の架橋と渡り初め－

長野市篠ノ井地籍は、江戸時代には北国往還が通り、交通の要地でした。明治５年（1872）ごろには、渡船場であった千曲川の矢代（屋代）の渡しに舟を 12 艘（そう）並べて長さ約 80m、幅約３ｍの船橋が架けられました。北国往還は国道５号線となりました。船橋は明治 22 年に木橋となり、43 年 10 月に篠ノ井橋仮橋に架け替えられました。長さ約 270m、幅約 3.6mの県営の橋で、国道方面から篠ノ井停車場への運輸が便利になりました。

大正８年（1919）４月に道路法が公布されました。この法律では道路を国道・府県道・郡道・市道・町村道とし、それまでまちまちだった道路の認定基準をきちんと定めました。産業・経済が発達して道路の利用度が高まり、整備が必要となってきていたからでした。

東京から府県庁所在地・師団司令部所在地・重要な港などに通じる路線は国道に指定されました。長野市を通る国道は 10 号線で、当時は碓氷峠を越えて長野県に入り、小諸・上田・飯山を経て新潟県へ出て、秋田まで至る路線でした。

大正 12 年 12 月 28 日、篠ノ井と屋代を結ぶ国道 10 号線の篠ノ井橋の架設工事が着工しました。取り付け道路の工事がなかなか進まず、地元民から「渡らずの橋（不渡り橋）」などとからかわれていた工事も約４年をかけて昭和２年（1927）10 月に竣工し、11 月 22 日に開通式を迎えました。

橋は長さ約 453m、幅約６ｍで、総工費は約 55 万４千円かかり、このうち道路費は約 15 万１千円（地元寄付は１割）でした。国庫から橋に３分の２、取り付け道路に２分の１の補助がありました。

当日午前 11 時から、内務大臣代理はじめ県知事・地元関係者多数の参列を得て式典が執り行われました。渡り初めに選ばれた雨宮縣村（千曲市雨宮）の依田徳右衛門家の３夫婦と神職を先頭に一同が橋の上を歩き出すと、身動きできないくらいに集まっていた群衆はドッと橋上に群がり、「さしもに頑強な篠ノ井橋も一時は墜落するかと危ぶまれた」ほどでした。

坂城からの芸妓（げいぎ）連が練り歩いて踊ったり、太神楽などもあって、空前の人出に興を添えました。篠ノ井町長は「橋が開通したからといって直接に受ける当町の利益等はほとんど無い」と述べるなど、地元の受け止めはおおむね冷めていました。

しかしその後、太平洋戦争中の軍需産業や戦後の自動車輸送の発達に、国道と篠ノ井橋は大きな役割を果たしていきました。

篠ノ井橋の渡り初め。群集が橋上を埋めた（昭和2年 11 月 22 日）

10　野球やスケート盛ん

－上空から撮影 城山公園一帯－

掲載の写真には、「昭和４年（1929）８月 30 日」と撮影年月日が記されています。城山公園一帯の上空から撮影されたもので、昭和初期の航空写真は数が少ない上に日付があることで、より一層貴重な資料といえます。写真の方位は、大まかにみて向かって左下隅が北で、右上隅が南になります。

写っている主な施設は、左から城山の野球場、噴水（二重円）を核とした公園、商品陳列館（噴水の斜め左上の建物）、そして中央から右手一帯は善光寺境内で、斜めに右下に三つ並んでいるのが千鳥ヶ池です。昭和６年３月開局の NHK 長野放送局の建物はまだありません。

明治時代後半から大正時代にかけて、野球・庭球、ウインタースポーツのスキー・スケートなどが学校や市民の間に普及していきました。野球熱の高まりの中、大正 15 年（1926）7 月、長野体育協会の城山グラウンドが完成しました。球場開きでは、７月 14 日に清はらい式を、翌 15 日に大観衆の応援を受けて法政チームと三田クラブの試合が行われました。

球場開きの準備に慌ただしかった 11 日夜、大門町・横町・横沢町方面の水道が突然断水しました。原因は日照りのためグラウンドへ水道水を大量に散水したからでした。真夜中に「市民が大切か、体育協会が大切か」と住民が市議に詰め寄る一幕もありました。

明治 43 年（1910）２月、諏訪湖研究者の橋本福松（古今書院創設者）が長野付近のスケート場（氷滑場）の調査を実施し、千鳥ヶ池（中でも中央の池）が好適であることを確かめました。翌 44 年１月 22 日には長野スケート倶楽部の発会式と競技会が千鳥ヶ池で開催されました。当日は諏訪からスケート選手の田中克己を招いての模範演技や 400 ヤード（約 360m）競走、３人スケーティングなどが行われています。

明治 41 年９月、城山一帯を会場に県主催で１府 10 県連合共進会が開かれました。その折に建てられた参考館は、焼失した県庁の仮庁舎として一時期使用されていたこともありました。45 年の善光寺御開帳を機に長野商業会議所はこれを借り受けて、長野県物産展を開催し大好評でした。ちなみに、このときの御開帳で参詣客は初めて 100 万人の大台を突破しました。

その後、会議所は国の認可を得て商品陳列館として経営することになり、大正３年７月１日、県下各郡市や岐阜県から出品の約４千点を陳列して開館しました。第二次世界大戦後は長野市公民館・日米文化センターなどとして利用されました。

大正４年 11 月の大正天皇即位を記念して同年６月、長野市は御大典記念公園の建設を決定しました。城山大通りの北側に西洋式庭園を造り中央に大噴水を設置する、というものでした。噴水は 11 月６日に試通し、10 日の即位式から放水を開始しました。噴水管の口径１インチ（約 2.5cm）のとき、水は 20m以上に達し日本一の大噴水と称賛されました。工費は約 9,600 円で、一般公開は５年５月からでした。

現在の城山公園一帯は野球場も商品陳列館もなくなり、千鳥ヶ池は多くが埋め立てられ、写真撮影当時と比べ様相は大きく変わりました。しかし長野市民憩いの空間としての役割を、今後も変わらずに担い続けていくことでしょう。

空から見た城山公園一帯。深田町上空から撮影（昭和４年８月 30 日）

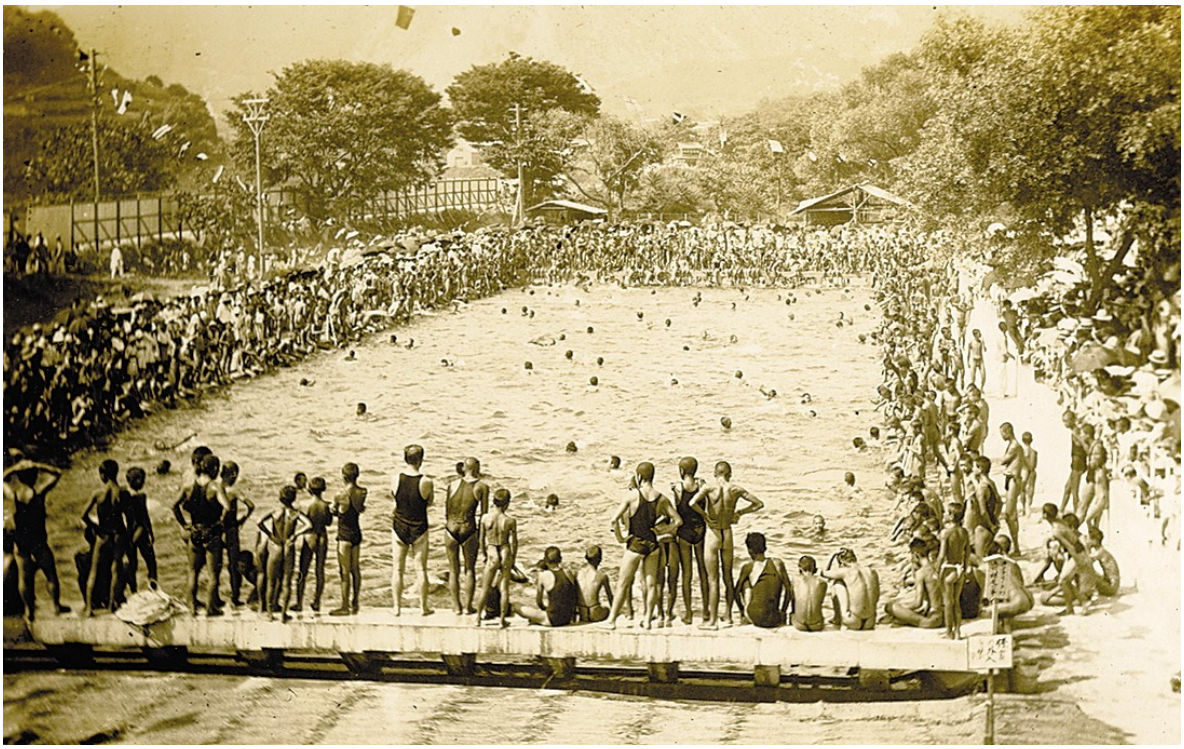
11 プール開き 大勢見物

－長野市営水泳場が山王小西側に完成－

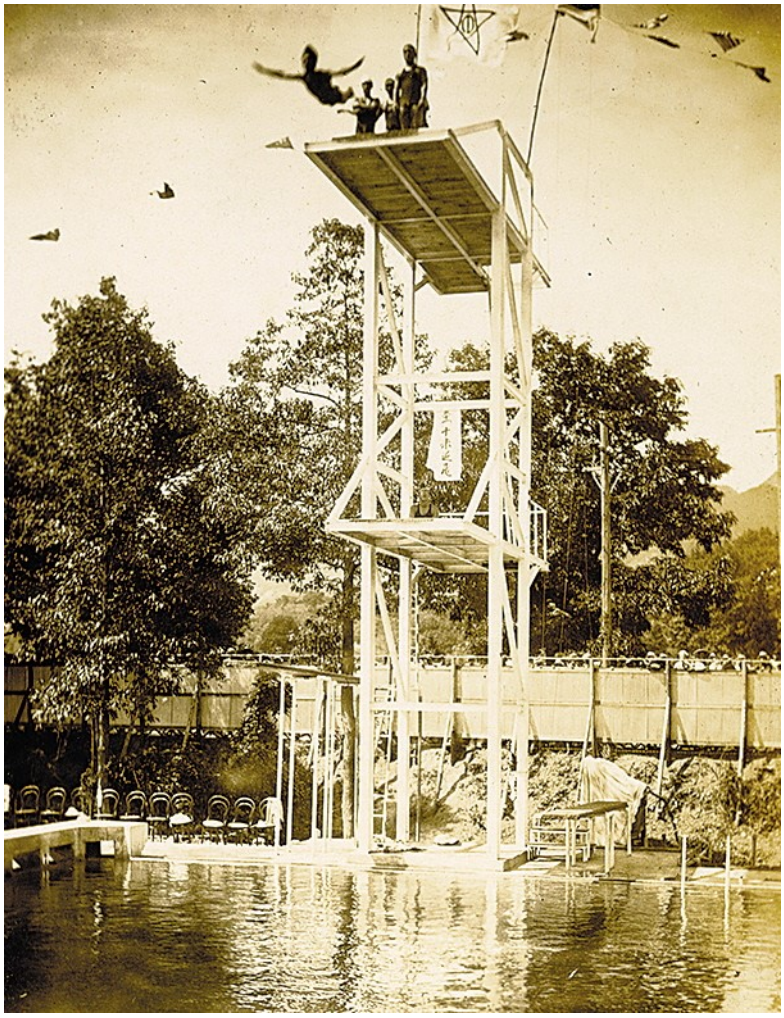
昭和５年（1930）９月３日、長野市営球場とともに御大典記念事業として計画された長野市営水泳場（県下初の公認プール）が山王小学校西側（現在の校庭）に完成しました。用地は約 1,500 坪（4,950 平方メートル）で総工費約３万１千円を費やし、①長さ 50m、幅 15mの大プール、②高さ 10mと 5mのダイビングボードに長さ３ｍと１ｍのスプリングボードを併設した飛び込みプール、③「滝プール」と呼ばれていた小学生向きの練習池などがありました。

このプールの完成に至るまでには、さまざまな問題がありました。昭和３年 12 月には、すでに裾花川の相生橋東側に市営プールを建設する計画が決定されていました。しかし４年６月の用地買収交渉は、堤防組合の拒否により不調に終わりました。９月には岡田区主催の期成同盟会ができ、南石堂や妻科などの賛成をとりつけ再交渉を続けた結果、12 月の市議会で坪５円、計 7,500 円で用地を買収することを決定しました。

一方、プールの施設費約２万５千円の捻出で、市は行き詰まりをみせましたが、昭和５年５月には県からの７千円の補助が決定し、ようやく６月 18 日に起工にこぎ



入場者で混雑する市営水泳場（昭和５年９月）



山王小学校西側に建設された市営水泳場の飛び込み台

着けました。

プール開きは９月３日午前９時から鈴木県知事や県会議員、その他市内の名士を集め、盛大に挙行されました。天気はよく、加えて物珍しさに多くの見物人が押し掛けました。

最初に型通り修祓（しゅうふつ）式があげられ、用水権をもつ芹田区民の合意を取り付けるため奔走した丸山弁三郎市長の式辞、知事の祝辞がありました。式泳・5m高飛び・10m逆さ飛びなどが行われ、正午から一般市民に開放されました。当時の長野市営プール開場式の報道記事は「処女浪切って嬉しい泳ぎ初め、長野市のプール開き、横田市議、河馬の泳法」との見出しで書かれています。

水泳大会は、市営プールを中心に行われるようになりました。昭和５年９月 21 日、長野市水泳協会主催の第１回県下中等学校水上競技大会が開かれ、須坂中学が優勝し、野沢中学が２位、長野商業・長野工業が３位・４位でした。当時、このプールは長野商業・長野工業・長野中学などの水泳部が練習に使用していました。第１回長野市小学校対抗水上競技大会も７年７月 27 日に行われ、後町小学校と接戦をした山王小学校が、市営プール横という地の利を生かし初優勝しています。

12　上空から模擬弾投下

－市民を動員し初の防空演習－

防空演習が最初に実施されたのは大阪市で昭和３年（1928）のことでした。昭和６年９月に満州事変が始まると、日本各地で防空演習が行われるようになり、翌年５月22日に長野市も軍部・警察・消防などの協力を得て多くの市民を動員し、大規模な防空演習を実施しました。

市長丸山弁三郎は、この年の２月に河原信三（消防部長）が印刷し頒布した『空中爆撃、大震火災に長野市民はどうするのか?』という小冊子が一般市民を覚醒させ、それが演習を行う動機となったとしています。4 月 22 日付の信濃毎日新聞は「空からの恐怖に対して近代科学の征空的発達と共に防空警戒の必要性が叫ばれてきた。長野市消防組でも全市民に防空思想の宣伝を必要とし、５月上旬全市的防空演習を決行することになった」と報じました。

4 月 23 日には、警察署・消防組・在郷軍人連合分会・警備団の代表者と市の関係者計 17 人で計画案について話し合い、実施期日を５月 22 日とし、軍部の協力で飛行隊・高射砲隊・機関銃隊・歩兵部隊も参加することになりました。演習種目は、①爆弾投下の実演、②空襲および対空動作、③消防・消毒・警備・救護・給与配給動作、④灯

長野市防空演習。建物屋上の機関銃と上空を飛ぶ飛行機

救護訓練をする看護婦たち

火管制、と決めました。

当日、集合所となった柳町小学校（現柳町中学校）では午前８時すぎに役員・防護員が活動を開始しました。最初の爆破演習警戒および高等飛行見学では、２機が南方より飛来し旋回した後、柳町東方に 25 キロ爆弾の模擬弾を投下し、すでに埋めてあった黄色爆薬を爆発させました。穴の大きさや吹き飛んだ土砂の高さなどから、その爆発威力を知らされました。入れ替わりに飛来した戦闘機２機の旋回や宙返り・低空飛行などに、地上の人々は手に汗して固唾（かたず）をのんで見守りました。

午後には、高射砲隊・機関銃隊が弾薬を装填（そうてん）して準備、婦人会・女子青年団員は割烹着（かっぽうぎ）・白襷（しろだすき）で給与作業につきました。午後２時 36 分、戦闘機２機が丹波島橋上空を通過の報に山王高射砲隊は第１弾を発射、ついで城山砲隊および各地区重軽機関銃隊が発射、さらに焼夷弾（黄色）・毒ガス弾（紫色）の投下で煙が全市を覆いつくしました。戦闘機は一端退いてはまた急襲し、本部にも催涙ガス弾が投下されました。

夜間の灯火管制訓練は午後７時から開始されました。丸山市長は全市民に向けて、一人の不注意によりせっかくの灯火管制も真価を失い大事をひき起すことになりかねず、全市民の協力がなければ目的を達成することができないので、全市民の熱意で本演習の最後の美を結びたい、と呼びかけました。

昭和８年８月９日、第１回関東地方防空大演習が実施されました。信濃毎日新聞主筆の桐生悠々は 11 日、評論「関東防空大演習を嗤（わら）ふ」で演習を批判しました。①空襲があったら木造家屋の多い東京は焦土化し、被害は関東大震災並みになる、②空襲は繰り返し行われる、③科学技術の発達で都市の位置は計算できるから灯火管制は意味がない、とし敵機を帝都（東京）の空に迎え撃つということはわが軍の敗北そのものであるなどと論じました。

このため軍部の怒りを買い退社に追い込まれました。しかし太平洋戦争末期には彼が予見した通り、米軍機の大空襲により日本は焦土と化したのです。

13　渡り初め見物一万人

－両側に歩道つきで丹波島橋竣工－

現在の丹波島橋は昭和 58 年（1983）から平成５年（1993）にかけて旧橋を併用しながら架け替えたものですが、船橋時代から数えても 140 年以上の長い歴史を刻む交通の要衝として重要な橋の一つでしょう。

橋のたもとに鎮座する文政３年（1820）建立の善光寺常夜燈や、歩道沿いの４カ所にある江戸時代の渡し舟から旧橋までの丹波島の様子を刻んだレリーフが、この橋の変遷の一端を教えてくれます。

ここに掲載した写真は、昭和７年（1932）12 月 16 日、鉄橋となった旧丹波島橋の竣工式の様子を写したものです。信濃毎日新聞（昭和７年 12 月 17 日付）は当日の模様を「この日稀らしく好天に恵まれ（略）この一大ペーヂエントを見んと犀川河原に押しかけた見物人は一万余人を数えた」と報じていますが、この写真でも式典とそれに続く渡り初め式を一目見ようと人々が群がっているのがよく分かります。写真の右側にはそれまで使用していた木橋から見物している人の姿も見られます。

丹波島は北国往還の善光寺への南玄関であり、江戸時代までは渡し舟によって人や物資が行き来し、犀川の渡しの宿場町としてにぎわいを見せました。

明治時代に入ると渡し舟は廃され、明治６年（1873）に設立された「丹波島船橋会社」が川幅 300 間（約 540m）に 46 艘（そう）の船をつないで船橋を架設し、次いで明治 22 年には「丹波島木橋会社」によって木橋が建設されました。この船橋時代から初代の木橋までは民間による経営で、通行者は船銭や橋銭を払って川を渡っていました。

しかし一般国道 10 号（当時）の沿道橋として有料ではいかがなものかといった議論が県会などで起こり、明治 35 年（1902）に民間委託契約が切れるのを機に官営に移行し、県初の直営工事として２代目の木橋に架け替えられました。

大正３年（1914）３月には長さ 286 間（約 514m）、幅員３間（約 5.4m）の３代目に替わりましたが、自動車をはじめとした交通量の増加などにより国道 10 号線の改修・拡幅と併せて永久橋への架け替えが計画され、昭和６年（1931）に農村振興土木事業（失業救済事業）の一環として着工しました。

そして１年後の昭和７年 12 月、総工費約 88 万円、延長 527m、幅員 12.2m（うち

車道 7.3m、両側に 2.45mの歩道）のゲルバートラス（両岸から梁を鋼材で組み合わせた構造）の優雅な大鉄橋として生まれ変わったのです。当時、歩道つきの橋は極めて珍しいものだったといいます。

鉄橋に架け替えられた丹波島橋の竣工式（昭和 7 年 12 月 16 日）

14　失業対策かねて建設

－狐池上松線（展望道路）－

昭和４年（1929）10 月、ニューヨーク株式市場の大暴落から始まった世界恐慌は、たちまち世界の資本主義諸国に波及し、ことに日本はその影響をまともに受けました。昭和４年から５年にかけて深刻な不況が経済界を襲い、さらに農村恐慌となって吹き荒れました。

日本からアメリカへの輸出の大きな部分を占める生糸の価格が暴落し、長野県下の製糸業は大打撃を受けました。これに頼る労働者や養蚕農家も多く、不況による工場の倒産、操業短縮や停止、繭価の暴落は労働者・農民に大きな影響を与え失業者が増大しました。

そのため県は、失業対策事業の主力を土木事業に集中することになりました。長野市では、あたかも都市計画が認定され、実行に移されるときでもあったので、道路や橋の改修が急ピッチで進められました。

写真の狐池上松線（展望道路）は、昭和８年度の失業応急事業として、国庫補助および県費補助を得て改修した都市計画による遊覧道路です。道路の起点を県道長野二ノ倉線上松地籍に置き、地附山の山腹から納骨堂（雲上殿）前に出て花岡平の霊山寺背面を横切って塩ノ湯の側面に出ます。

さらに往生地の集落を横断して、観音堂の裏に出て水道貯水池の傍らを下り、狐池の集落に出て獅子沢川にかかる子持橋を渡り、女学校（現在の長野西高校）前で市道花吹線に連絡するものです。

昭和７年 11 月１日に起工し、延長 3,310m、幅員８ｍに改修、昭和８年５月 20 日に竣工しました。これによる失業救済人員は延べ６万 4,793 人に上り、総工費 10 万 8,465 円を費やし、このうち国庫補助として２万 7,371 円、県費補助として１万 348 円が交付されました。

そのほか昭和初期、とくに失業対策をかねて建設された道路は、長野一ノ鳥居線（失業救済人員４万 6,353 人）や県道二ノ倉長野線改修工事などがあります。また、南県町から新田町に至る 400mほどは昭和９年２月 24 日に着工し、翌 10 年６月 24 日に幅員 25mの道路が完成して国道 10 号線（現 117 号）に接続し昭和通りとなりました。これによる失業救済人員は述べ 13 万７千人あまりに及びました。

昭和６年の満州事変、７年の５・15 事件、８年のドイツ・ヒトラー政権成立、11 年の２・26 事件など、国の内外で戦争の機運が高まっていく状況下での失業対策事業でした。

失業対策事業で建設された狐池上松線（昭和 8 年 5 月 20 日竣工）

15　来賓や生徒が壇囲む

－市町村をあげて戦没者の葬儀－

昭和12年(1937)7月7日、中国の北京郊外の盧溝橋で日本と中国の軍隊が衝突し、日中戦争が始まりました。政府は9月2日、この戦争を「支那事変」と名づけ、28日から華北で総攻撃を開始し、戦線は瞬く間に中国全土へと拡大していきました。そして4年後の昭和16年12月、とうとう太平洋戦争へと突入したのです。

開戦2年目の昭和13年5月20日、長野市は徐州陥落を祝って午後1時から小学生・女学校生徒の旗行列、同7時から一般市民が参加してちょうちん行列を行っています。太平洋戦争開戦後の昭和17年2月18日には、シンガポール陥落を祝って、「大東亜戦争第一次戦勝祝賀大会」を城山国民学校校庭で行いました。国民学校初等科5年生以上と中等学校全生徒はブラスバンドを先頭に入場し、一般市民なども合わせて約1万8千人が参加し戦勝を祝賀しました。

戦勝を記念し市民を動員した華々しい行事が行われる一方で、出征する兵士も徐々に増加していきました。長野市では昭和13年の徴兵検査で、歩兵・騎兵・工兵などの現役兵に279人が編入され、また補充・臨時召集で陸軍・海軍へ292人が応召しています。学校関係をみると市内7小学校から教員8人が出征し、家族に出征軍人がいる児童・生徒は、938人に上っています。

戦没（戦死・戦傷死・戦病死）した兵士の葬儀は、市町村が行っています。長野市では、昭和13年に市葬を行った戦没者は28人で、15年には41人、17年には46人へと増加しています。昭和15年の場合をみると、4月20日に24人、10月19日に17人、いずれも城山運動場において合同の市葬を執行しました。

写真は、昭和15年4月28日、篠ノ井町（長野市篠ノ井）の通明尋常高等小学校校庭で執り行われた町葬を撮影したものです。正面に壇が設けられ、旗や花輪で飾られて、来賓、児童生徒、町民が三方を取り囲んで多数参列している様子が分かります。

同年5月の上水内郡津和村（長野市信州新町）の葬儀の場合、遺骨が到着すると出迎えをし、後日執行の葬儀に向け軍関係者、国・県・町村関係議員、神社・寺院、各団体長などに宛てて案内状を出しています。葬儀当日は、旗・花輪・村長・写真・遺骨を先頭に、僧侶・警察官・遺族・学校長・議員・区長・各種団体長・軍人分会・警防団・青年団・国防婦人会・児童生徒・一般村民の順で葬列を組み、式場まで行進しました。

太平洋戦争も末期になると、戦没者の激増、激しい本土空襲、食糧増産・勤労動員・防空訓練の強化・徹底など、非常事態が日常化していきました。市町村をあげての葬儀も簡略化されるようになり、戦争が終結してから行われる場合も多かったのです。

戦後になり、長野市の小学校の完全給食は昭和 26 年 2 月から実施されました。このとき調理従事者に失業中の未亡人を採用することになり、職業安定所には 70 人を超える応募者があった、と新聞報道されています。応募者の多くは戦争で夫を失った女性だったと思われます。戦後 28 年たった昭和 48 年の「戦没妻特別給付」によると、該当する女性は 1,003 人いました。家族の中心となる働き手を失い、消えることのない思いを抱いた多くの遺族は、長い戦後を生きなければなりませんでした。

篠ノ井町（長野市篠ノ井）の通明尋常高等小学校（通明小学校）校庭で行われた戦没者の町葬
（昭和 15 年 4 月 28 日）

16　初代は善光寺から移転

－如是姫像の誕生と変遷－

社寺などについて、その由来や信仰に関係した霊験などをまとめたものが「縁起」です。「善光寺縁起」も平安時代にはその原形ができていた、と考えられています。

百済（くだら）の聖明王により教典や仏像が伝えられた記事は『日本書紀』に記されています。平安時代末に成立した歴史書『扶桑略記』では、善光寺縁起の話として、天竺（てんじく＝インド）毘沙離（びしゃり）国の月蓋（がっかい）長者が釈尊の教えにしたがい礼拝すると、阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩が現れ、その姿を急いで鋳造したのが、百済からもたらされた仏像で、それが善光寺の本尊なのである、と伝えています。

長野駅前の２代目如是姫像の除幕式（昭和 23 年 10 月 1 日）

鎌倉時代には浄土信仰とともに善光寺信仰が全国的に広がっていきます。女性の善光寺参詣の実話や伝承が記録に残されるのもこのころからです。実現しませんでしたが源頼朝の妻北条政子が善光寺参詣を願っていたこと、曽我十郎が弟・五郎と父の仇（あだ）討ちを果たして処刑された後、彼の愛人であった遊女・虎が善光寺で念仏に励んだこと、久我雅忠の娘で『とはずがたり』の作者・二条が善光寺へ参詣して百万遍の念仏に没頭したことなどで、女人往生・女人救済の寺としての善光寺がクローズアップされてきました。

鎌倉時代末から南北朝時代にかけて成立した『平家物語』の「善光寺炎上」の中で、初めて月蓋長者の娘が悪病から救われる話が語られます。つづいて成立した『源平盛衰記』で、この娘の名は如是姫であることが明らかになります。ここに善光寺信仰の大きな柱の一つである、女人往生・女人救済の象徴ともいうべき女性が、如是姫という名で登場したのです。

この如是姫が、如是姫像（銅像）として市民の前に姿を現したのは明治 41 年（1908）10 月 21 日です。善光寺本堂西側の経蔵と大勧進の間に設置され、この日に除幕式が行われました。 9 月 20 日から 52 日間の日程で、城山公園一帯を会場として開催された 1 府 10 県連合共進会を記念して、東京美術学校（東京芸術大学）教授・竹内久一に依頼して制作されました。

昭和 10 年（1935）8 月 1 日、長野駅改築工事の起工式が行われました。この年 3 月、長野市は善光寺境内の如是姫像を駅前広場へ移転し、水盤を設置して常に水を噴出し、「仏都入りの善男善女にまず清らかな印象」を与えたいと、善光寺保存会との交渉を開始しています。

11 年 3 月 15 日、「仏都の玄関口としてふさわしい仏閣型建築様式を巧みに取材」したと形容された新長野駅が竣工し、4 月 1 日から御開帳も始まりました。当初は御開帳に間に合わせる予定で進められていた如是姫像の移転は、駅前広場の拡張・整備に手間取ったことや、説明の銅版の内容をめぐって折り合いがつかず、年末になってようやく決着がつき台座に据えられました。

しかし太平洋戦争が激しさを増す中で、金属回収の一環として昭和 19 年 2 月、如是姫像は軍事供出の憂き目にあい、残された台座の下には防空壕が掘られるというありさまでした。戦後の 23 年 10 月 1 日、古代インドの美人を模した 2 代目如是姫像の除幕式が行われました。作者は竹内久一の門下生・佐々木大樹、鋳造者は堺幸一（共に富山県）です。

平成 27 年 3 月 14 日、北陸新幹線長野―金沢間が開通する予定です。整備された駅前広場に如是姫像は再び姿を現しますが、女人救済、平和を願う像として、長野を訪れる多くの人々や市民をこれからも優しく見守り続けることでしょう。

17　地蔵盆の日まで続く

－善光寺境内の盆踊り大会－

昭和20年（1945）８月15日、太平洋戦争が終わると、戦争のために中止になったり、縮小化されていたさまざまな行事・祭りなどがだんだんと復活してきました。

供出のために無くなってしまった長野駅前の如是姫像が再建されたり、新しい憲法の下、新教育制度による小学校や中学校、大学、幼稚園・保育園などが設置されたりしました。一方で城山小学校の火災、蔵春閣・城山館（じょうざんかん）の焼失、裾花川の堤防決壊、インフレの進行、さらには朝鮮戦争の勃発などが、わずか５～６年のうちに起こりました。

その他にも長野商工会議所の設立、恵比寿講の復活、雲上殿の落成、平和博覧会の開催、日本三大祇園祭ともいわれる長野祇園祭の復活などがあり、昭和26年には不況打開のために、長野商工会議所の働きかけもあり善光寺如来渡来 1400 年記念の御開帳も開催されました。その折にインドのネール首相から白牛が贈られました。

当時、多くの市民にとって夏の一番の娯楽というと盆踊り。善光寺でも山門（三門）の南側、六地蔵前広場で盆踊り会が行われていました。盆踊りで踊られていたのは「おらが善光寺さんは　常夜灯の明かり　末世衆生の　涙を照らす」の歌詞で知られている、昭和９年に信濃毎日新聞社が募集し作られた新民謡の「信濃よいとこ」や民謡などでした。

このころの特徴は、盆踊りの期間の長さでした。盆の入りの８月13日から始まり、お盆を過ぎても続けられ、終わるのは「地蔵盆」の８月23日でした。この日は、ぬれ仏、六地蔵、仲見世の延命地蔵など境内各所の地蔵尊を巡り、子どもが健やかに育つよう祈願し、参列した子どもにはお札や御供（ごくう）のお菓子が配られました。

この盆踊りの様子を『夕刊信毎』（昭和27年８月23日）は、「善光寺で夜毎にぎやかにくりひろげられた長野市善光寺山門前の納涼盆踊り大会もいよいよ 23 日で終幕となるが、お盆過ぎとともに訪れた涼しさに踊り手人手は日増しに減った。最後を飾る〝お別れ踊り〟だけは格別人足をさそうもののフエ、タイコの音には早くも哀愁が感ぜられ、秋の近づきを告げている」と写真入りで報じています。

昭和29年７月に信濃毎日新聞社選定、長野県蓄音器商組合協賛、「善光寺参りは日本晴れ　ほんにぶらりこ　良い日和」で始まる新民謡「善光寺参り」が神楽坂はん子の歌で出されました。昭和44年には都はるみの歌で出され、現在まで続く盆踊りの定番となっています。

昭和 40 年代に途絶えてしまった善光寺盆踊りでしたが、善光寺本堂再建 300 年記

念の年にあたった平成 19 年（2007）８月 13 日から 15 日まで「善光寺お盆縁日」という名前で、縁日と 14 日・15 日の２日間だけの盆踊りが復活しました。善光寺近辺の商店や地区の青年部有志が屋台を出店しました。

善光寺境内では高さ 7.5m、幅５m四方の木造２階建てのやぐらを設け、夕方５時～６時 20 分は子供の部、６時 30 分～７時は浴衣姿に蓮（はす）の冠を着けた子どもたちが、お盆の精霊に献香、献花を行い導師より洒水（しゃすい）を受ける精霊会（しょうりょうえ）を開催。７時～９時は大人の部として「善光寺参り」「善光寺盆踊唄」「炭坑節」「木曽節」「箱清水音頭」、さらには東日本大震災復興祈願の「相馬盆唄」などを踊り、観光客も飛び入りして踊りの輪を大きくしています。

善光寺境内の盆踊り(昭和 26 年 8 月)

18　商店街も参加し飾る

ー月遅れの８月に市内で七夕祭りー

七夕では、サトイモの葉の露を集めて墨をすり、短冊に願い事を書いて青竹に飾ると習字が上達するなどと伝えられてきました。また織り姫と彦星が１年に１度再会するという話から、願い事がかなうようにといろいろな願い事を書いて、ササや竹の葉に飾ったりしました。

野菜や果物を供えたり、ナスやキュウリで牛や馬をかたどったりして供え、祖先の霊を慰めたりする地方や、七夕飾りを７日未明に海や川に流す「七夕流し」または「七夕送り」をする地方もあります。中国の風習と日本の信仰が合わさったものといわれ、奈良時代から行われて次第に日本独特の祭りになっていきました。七夕は五節句の一つで、江戸時代には庶民の間でも行われるようになり、全国的に広まっていきました。

七夕は旧暦の７月６日夕から７日に行われていましたが、新暦になってからは新暦の７月７日に行われる所と１カ月遅れの８月６日から７日に行われる所があります。長野では月遅れの８月に行われています。戦後の昭和 26 年（1951）７月７日の『夕刊信毎』には、「一足先に七夕祭り」という見出しで、長野旭幼稚園では７月 20 日から夏休みになってしまい８月７日にできないので、今日７日に七夕の歌を歌ったりして七夕祭りを行った、と報じています。

一方、昭和 22 年に設立された長野商工会議所は戦後復興のために祭りや行事の発展に取り組み、写真にあるような商店街などの「七夕まつり」が始められました。戦後いち早く長野市権堂商店街協同組合などの実行委員会が主催した「権堂七夕まつり」は昭和 23 年から始められ、五分（５％）安という大売り出しを前面に押し出し、人出は数万人といわれました。

『長野商工会議所六十年史』には「戸ごとに絢爛（けんらん）たる大七夕を飾り、その順位をきめるコンクールも行った。これが人気をよんで年とともにさかんとなり各町もこれにならってだんだんにさかんになった。26 年には商工会連合会が主催となり、商工会議所でも審査員を派遣してこれに協力し長野市の夏の名物となって現在に及んでいる」と述べられています。

大門町上商工会では、大きな青竹に短冊やくす玉などを飾りつけ、各戸前の道路に飾りました。昭和 33 年の「七夕祭り参加名簿」によると、期日は８月５、６、７の３日間で、参加店舗数は 22 店、青竹１本 120 円で計 24 本、大判色紙が計３千枚、くす玉小 10 個・中 30 個・大１個、総計 4,503 円の支払いをしています。翌 34 年、35 年は８月６、７日の２日間に行われています。

こうして始まった七夕祭りは昭和 47 年、権堂商店街協同組合が実行委員会となって「長野七夕まつり」と名称が変わり、各店が豪華な七夕飾りを並べて大勢の市民や観光客の関心を集めてきました。現在では商店のみならず幼稚園・保育園、小学校、さらには一般公募の作品も展示し、新幹線や世界遺産などをテーマにした作品や、権堂周辺で活動する作家の作品なども展示。７月末から８月７日まで行われ、長野の七夕祭りとしてにぎわいを見せています。

長野市大門町の七夕祭りの飾り（昭和 26 年 8 月）

19　10カ村と新長野市に

－合併祝う児童生徒の旗行列－

昭和28年（1953）9月、国は「町村合併促進法」を公布しました。これは新制中学校の設置・管理や自治体警察、社会福祉、保健衛生などが市町村の新しい事務とされたことで、その処理を能率的に行うために自治体を適正規模に拡大する必要から定められたものでした。

この法律を受けて長野市とその周辺の村々では本格的に合併に向けた議論が始まりました。まず長野市は古里村に合併を打診。その後、大豆島村や朝陽村・柳原村などに働きかけ、最終的に10カ村との合併を実現し、翌29年4月1日に新長野市が誕生しました。

新たに合併したのはこの4村のほかに長沼村・若槻村・浅川村・芋井村・小田切村・安茂里村で、これにより長野市の人口は約4万人増え、14万7,700人となりました。このとき、真島村・青木島村・稲里村・小島田村とも合併の調整が図られましたが、実現には至りませんでした。この4村は昭和30年に合併し更北村となりましたが、その後、40年10月に近隣の篠ノ井市や松代町などとともに長野市と合併することになります。

昭和29年4月の合併により長野県の市町村は6市34町338村から9市38町299村になり、全体の自治体数が減少しましたが、それから半世紀後の「平成の大合併」を経た現在の市町村数（19市23町35村）と比べると、まさに隔世の感があります。

祝賀ムードに包まれた長野市ではさまざまな記念式典が開催されました。信濃毎日新聞（4月1日付）によると、祝賀記念の行事は1日から3日間にわたって各所で行われると報じています。1日目は午前6時の市内5カ所での打ち上げ花火を皮切りに、善光寺本堂での市政・村政物故者慰霊祭、会場を蔵春閣に移しての10カ村編入祝賀会、善光寺境内での芸能大会などが行われ、2日目は15台の花自動車が新たに合併した各地を訪問したほか、市民有志の仮装行列が中央通りを練り歩き、長野駅前では素人演芸会が開催されました。

最終日の3日目は、警察音楽隊のブラスバンドを先頭に市内の小中学生1万2千人が長野市旗と日の丸の旗を手に中央通りから城山の祝賀会場まで行進しました。ここに掲載した写真は八十二銀行本店（西後町・現長野支店）辺りのビルの屋上から写したと思われる1枚で、市民が沿道を埋め尽くす中、子どもたちの旗行列が延々と続くにぎやかな雰囲気を切り取っています。

この日は駅伝競走や神楽行列なども行われ、祝賀ムードに沸いた3日間は夜空を彩

る仕掛け花火で華やかにその幕を閉じました。信濃毎日新聞は「日本晴の下、喜びみつ」との見出しでこの晴れやかな様子を伝えています。

長野市と 10 カ村の合併を祝賀し中央通りを練り歩く旗行列（昭和 29 年 4 月 3 日）

20　ネオン輝く街に繁栄

－商業の中心･権堂 町の成立と変遷－

権堂町のアーケード通りが中央通りと接する手前の北側に往生院があります。西町に移る前の西方寺がこの地にあったといわれています。現在の善光寺本堂造営のとき、西方寺は仮本堂になっています。中世の火災の際、本尊を西方寺へ安置したことも考えられ、仮本堂を権堂と呼ぶようになったと伝えられています。また厳堂（権堂）は金堂のことで、善光寺本堂が権堂に置かれていたのではないか、という説もあります。いずれにしても、この往生院の辺りは権堂の起源の地ということがいえそうです。

江戸時代の寛文のころ（1660 年代）の地図に、はじめて権堂町という町名が登場します。東町を南に下り鐘鋳堰（かないせぎ）を渡って北国往還に並行して南下し、上後町と下後町の境で往還に通ずる道の両側に街並みができていきました。これが表権堂です。この東側に並行しているのが裏権堂で、弘化 4 年（1847）の善光寺地震の後に発達してきた街でした。

にぎわう夜の権堂通り（アーケード設置前、昭和 32 年）

宝永 4 年（1707）、善光寺の現本堂が完成し門前が整備され、参詣客や宿泊客が多くなってくると、表権堂に客を相手にした水茶屋が増えはじめました。天保期（1830 年代）になると、水茶屋は 34 軒、抱女（かかえおんな）は 238 人に達しました。通りに沿って水茶屋が立ち並び、大いににぎわっていきました。

子母沢寛の小説『国定忠治』に登場する上州（群馬県）国定村の侠客国定忠治は、人殺しなどの罪で役人に追われ、天保 13 年（1842）に関所破りをして信州へ逃れました。権堂で水茶屋を営み目明かしでもあった島田屋伊伝治は上州出身で彼の友人でしたから、国定忠治が権堂を訪れたことがあった

かもしれません。秋葉神社境内には彼の碑が建てられています。

明治10年（1877）、長野県会は遊郭設置を議決し、長野では鶴賀村権堂に設置がきまり、貸座敷という名目で翌年から営業が開始されました。遊郭設置後、権堂は一時衰退しますが、明治15年に町芸妓（げいぎ）の営業が許可されると、芸妓置屋・割烹・酒楼が軒を連ね、再び繁盛するようになりました。大正２年（1913）には、後町から裏権堂までの道路が新設・改修され、相生町通りが開通し鶴賀遊郭まで真っすぐに東西に結ばれ、町としての整備も一段と進みました。

アーケードが設置された権堂通り（昭和41年）

昭和恐慌・15年戦争など時代の大きなうねりのなかで浮き沈みはありましたが、市内一の繁華街には変わりはありませんでした。戦後は昭和30年代まで、店頭装飾コンクール・照明コンクールなど時代を先取る活動にも取り組み、商業の中心地、ネオン輝く街として繁栄しました。昭和36年３月には県下最初のアーケードが設置され、40年には緑町までアーケードを延長しています。

しかし昭和40年代以降、人口のドーナツ化現象、大型店の郊外への相次ぐ出店、商圏の長野駅周辺への南下、買い物客の交通手段の変化などの複合的な要因により、権堂町を利用する客が減少していきました。さまざまな努力が続けられ、平成27年（2015）２月には再開発施設「権堂イーストプラザ」の南棟がオープンしました。今後も町の復活を願って、人々の活動が重ねられていくことでしょう。

21　雲上殿と地附山結ぶ

ー県下初の営業ロープウェイー

城山公園の一角、長野市公文書館が入る長野市城山分室（元 NHK 長野放送局）は四方を見晴らす丘の上にあります。北に目を転じると、まさに箱庭のような箱清水を眼下に往生地や善光寺雲上殿、大峰山から地附山に続く善光寺背後の山並みが手に取るように見渡せます。

その地附山には今から 50 年ほど前、展望ロープウェイが運行されていました。営業期間はわずか 14 年間でしたが、ご記憶にある方もいらっしゃるのではないでしょうか。

昭和 35 年（1960）6 月、観光立市をめざす長野市は観光開発推進委員会を設置し、5 カ年計画による観光開発案を策定します。善光寺周辺や城山公園の整備、飯綱高原の開発などとともに大峰山・地附山一帯の観光開発も盛り込まれており、この案に沿って大峰山は市当局が、地附山は民間が主体となって開発に着手することになりました。

同年、地元資本により設立された長野国際観光がロープウェイ建設に着手。翌年春の善光寺御開帳と長野産業文化博覧会の開催にあわせ、雲上殿と地附山山頂（標高約 600m）を長さ 685mのロープウェイで結び、さらに地附山山頂には遊園地を造って参詣者や行楽客、家族連れなどを集客し、長野観光の目玉にしようという計画でした。

そして御開帳を間近に控えた昭和 36 年３月、県下初の営業ロープウェイといわれる「善光寺ロープウェイ」が開業します。「いいづな」「とがくし」と名付けられた 41 人乗りゴンドラ２台が運行しましたが、それまで山頂まで歩いて約 50 分かかっていたのがロープウェイだと３分半で登れるとあって好評を得ました。

展望台を備えた山頂駅は善光寺平を一望する絶好のビューポイントだったことでしょう。山頂駅に隣接した遊園地も５月３日に開園しました。さまざまなアトラクションの中でもスリル満点の飛行塔や動物園が人気の的だったといいます。

長野国際観光の計画では第２期工事としてホテル建設なども予定していましたが、それも束の間、本格的なマイカー時代が到来するなかで昭和 39 年、戸隠有料道路「バードライン」が開通し、観光の主役は飯綱や戸隠に移っていきました。通過点となった地附山では 40 年代以降、次第にロープウェイの利用者が減少し、50 年には廃止されることになったのです。

昭和 36 年 3 月 20 日にゴンドラ運転を開始した地附山山頂に向う善光寺ロープウェイ

22　地形生かし城郭型に

－大峰山展望台（大峰城）を建築－

４月５日（平成 27 年）から始まった御開帳でにぎわう善光寺の山門をくぐり、本堂前の回向柱に向かって左奥、日本忠霊殿の左肩越しに見えるのが大峰山です。山の頂上付近に白壁のお城が築かれていますが、これが大峰山展望台です。

昭和 30 年（1955）８月、長野商工会議所は長野市に対して「善光寺を中心とする観光圏確立」に関する建議書を提出しました。長野市もそれに合わせるように、34 年７月から具体的な計画立案を始め、翌年６月には観光立市を目指すための観光開発推進委員会を設置して５カ年計画による観光開発案を策定することになりました。

一方、大峰山・地附山については、すでに 34 年９月に、皇太子ご成婚を記念して二つの山を一体化した公園を造ろうという「大峰山自然公園案」を成立させていました。

計画案は、①大峰山の頂上、謙信物見の岩、池の平などに公園を新設し、遊園地・展望台・キャンプ場などを設置、②歌が丘から荒安へ抜ける約５km のドライブウェイの設置、③雲上殿の裏から物見の岩を中継し、頂上を結ぶ約１km のケーブルカーの建設など、総工費５億円にも及ぶものでした。

長野商工会議所でも観光開発計画対策特別委員会を開催し、県・市の関係者を招き県の開発計画、市の大峰山観光開発計画を聞いたりし、また市の土木課・商工観光課の参加をえて現地視察したり研究を重ねたりしながら開発の要望書を提出しました。これに対して市は、大事業であるので会議所の意見を充分に尊重していきたいと回答し、開発は、大峰山一帯は市が主体、地附山一帯は民間資本を導入した長野国際観光会社を設立して行うこととなりました。

昭和 35 年６月、第１期工事として荒安から大峰山頂まで 1,700m、幅５mの観光道路の建設が始まりました。経費削減のために自衛隊の協力を得て２カ月で終了、翌年春には池の平まで1,400mの第２期工事も完成しました。当時は自衛隊による工事は珍しかったのですが、経費削減を狙う市と、国民に親しまれることを目指す自衛隊の意見が一致した結果でした。

工事を進めると、石臼の発見や空堀・郭など山城の遺構が確認され、山頂に城郭型の展望台建設案が浮上しました。大峰山史跡調査委員会の答申により、地形を生かして城郭型展望台を建築することとしました。

昭和 36 年 11 月 10 日に起工式が行われ、翌 37 年１月には水道局による水道敷設、中部電力による外線電気工事を経て、５月 12 日に上棟、11 月 10 日に竣工式が行われました。こうして完成した展望台は４階建て鉄筋コンクリート造で、自治省の指導も

あって大峰山展望台と呼ぶこととしました。開館は38年4月10日でした。

その後、長野駅から直通バスが運行され、夜間照明で市街地からよく見えることもあって、観光のシンボルとなりました。昭和38年度の開館日数は244日で、利用者は大人3万6,905人、小人5,853人、大人団体3,807人、小人団体2,443人で、収入は望遠鏡収入も合わせて合計149万7,065円でした。

入館者を増やすため昭和56年からは「大峰城チョウと自然の博物館」となり、最終的には3,200点のチョウの標本を展示しました。この年は約5万4千人の入館者がありました。しかしその後、60年7月の地附山の大崩落により戸隠バードラインが通行できなくなり、その影響もあって入館者は激減しました。市は平成13年（2001）に閉鎖を決定し、19年にはついに廃止となりました。

完成間近の大峰山展望台（大峰城）

23　土砂 30 万立方メートル流出

ー松代群発地震で牧内地区が地滑りー

昭和 40 年（1965）８月３日、埴科郡松代町（現長野市松代町）の皆神山（みなかみやま）付近を中心に、地鳴りとともに日に何度となく襲う群発地震が発生しました。地震発生から２カ月ほどたったころには「最大震度５程度で、普通の家なら心配ない。火の始末だけは冷静に」（気象庁地震課）という、せいぜい中程度の地震と思われていました。しかしその後も地震はやむことなく続き、終息宣言を出して地震対策本部を解散したのは昭和 45 年６月でした。

この松代群発地震で観測された地震の回数は、体に感じる有感地震だけでも６万回を超え、体に感じないものを含めると 70 万回を超えました。昭和 41 年４月 17 日には一日に 661 回の有感地震があり、約２分に１回地震を感じるというありさまでした。

地震が起きてからは松代町をはじめとして、11 月までに旧篠ノ井市・更北村・若穂町・川中島町・信更村・七二会村・大岡村・信州新町・鬼無里村・中条村・戸隠村（いずれも現長野市）などに地震対策本部が設置されました。老朽化した建物を使用禁止にしたり、筋交いや倒壊防止支柱で補強したり、プレハブ式建物を建設しました。中学校では防災・避難の点から女生徒のスカートを禁止し、スラックスをはくようにしました。

松代町東条牧内地区では活動がピークを迎えていた昭和 41 年９月、ついに大規模な地滑りが発生しました。５月３日に初めて区内の桑畑で亀裂を発見。９月３日には３～４ｍにわたる亀裂が３カ所見つかり、同時にこのころから湧水が観測され、以後、亀裂と湧水、さらに場所により地面の盛り上がりが観測されました。16 日には２時間に３～４㎝の地滑り現象が確認されるようになりました。

17 日に入り消防団 35 人態勢で警戒を続ける中、午前４時 30 分ころ地割れ部分の 50～60ｍにわたって地面が盛り上がり、ついに午後２時７分ころ、長さ 300ｍにわたり土砂約 30 万立方メートルが流出し、家屋全壊 11 棟という被害が発生しました。

すぐに消防団全員に招集がかかり、残された 35 世帯の家財道具を安全地帯に移したり、交通整理をしました。県知事も到着し、自衛隊への出動要請、警察と連携しての活動、県警機動隊の活動などが始まり、松代保育園で 350 人分の炊き出しの準備もしました。

18 日からは地滑り現場の湧水排除を最優先することにし、復旧作業を 500 人態勢で行うことにしました。大きな地滑りでしたが、幸いにも人命が失われることはありませんでした。

平成 18 年（2006）8 月 27 日、松代文化ホールでシンポジウム「松代群発地震の 40 年」が開かれました。牧内地区が地滑り被害を受けてから 40 年になるのを受けて、松代地震センターや信州大学大学院による研究成果を報告する会となりました。地震発生の原因について、マグマが冷え固まる際に出た炭酸ガスを含む水が松代町の地下にあり、岩盤の裂け目に入って次々とずれを引き起こして地震を発生させた、としています。厳密な意味で現在も松代群発地震は終息しているわけではなく、若い人や住民に松代群発地震とは何かを知ってほしい、と結んでいます。

松代群発地震で発生した松代町牧内地区の地滑り(昭和 41 年 9 月 17 日)

24　冬季スポーツの拠点に

－飯綱高原スキー場開き－

長野市のスキー愛好者の若者や学生は、戦前から飯綱高原大座法師池南側の入坂（仁王坂）付近一帯のスロープを利用して楽しんでいました。戦後数年間その状態が続いていましたが、次第に愛好者が増えたり、市民の行楽や観光の面からもスキー場の設置が望まれてきました。

昭和 23 年（1948）１月に長野市公民館がスタートすると、社会教育の一環として体育祭など市民の体育事業が進められるようになりました。26 年１月から２月にかけて市体育協会と公民館の主催で初めて市民参加のスキー講習会が開かれました。

昭和 40 年６月、飯綱観光開発の一環として入坂スキー場を飯綱鉱泉近くに移して飯綱高原スキー場としました。これは、飯縄山の南東中腹 20 万平方メートルにわたって初級から上級まで 4 コースを整備する平均斜度 16 度、標高 1,250mのスキー場で、鉱泉西側を起点として延長 900mのスキーリフト 1 基と、鉱泉手前の高台に 70 人収容の食堂と無料休憩室からなるスキーセンターを整備。総事業費約３千万円で着工し、12 月 27 日に竣工しました。

翌年１月 27 日の信濃毎日新聞は「昨年 12 月末にスキー場開きを行った長野市営飯綱高原スキー場は、このところ日曜日などを中心にどっとスキーヤーがおしかけ、予想外の人出でにぎわっている。当初、市は１日 200 人～300 人のスキーヤーが来ればいいと考えていたが、戸隠バードラインができて交通の便がよいことや３千万円を投入して整地、リフト、スキーセンター建設など本格的なスキー場づくりをはかったことなどがきいて、大にぎわい。日曜日や祭日などは千人～２千人のスキーヤーが訪れている」と報じています。

２月 13 日には飯綱高原スキー場の開設を記念して第 20 回市民体育祭スキー競技大会が開かれました。フランスから来日中のジャニーヌ・モンテラ選手を招いて模範滑走を披露するなどたくさんの行事が行われました。

飯綱高原スキー場はその後、昭和 42 年 12 月までには第２スキーリフトが造られたり、滑走コースも４コースとなり、飯綱高原一帯に発祥した日本最初の原始忍法「飯綱法」にちなんで「天狗飛びコース」（上級）、「雪隠れコース」（中級）、「くの一コース」（初級）、「子天狗コース」（初級）と愛称がつきました。さらにスキー場周辺に駐車場や休養施設などが設置されました。

12 月 24 日午前 10 時からはスキー場開きが行われ、午前中リフトが無料開放になりました。こうして飯綱高原スキー場は、このころから市内小中学校のスキー教室も開かれるなど長野市民の冬季スポーツ場として大きく発展しました。

リフトやコースが増設された飯綱高原スキー場のスキー場開き（昭和 42 年 12 月 24 日）

25　堤防決壊や内水氾濫

－台風や豪雨で繰り返し災害－

昭和 56 年（1981）から 60 年にかけて台風や梅雨前線に伴う豪雨により、大きな災害が連続して起こりました。とくに千曲川・犀川という大河が合流する長野市域や北信一帯では、長野市松代町をはじめ長野市若穂から飯山市にかけての各地で大きな水害に見舞われました。

56 年 8 月 22 日、台風 15 号と前線の影響で大量の雨が東北信地方に降り、千曲川流域では昭和 34 年以来の水害となりました。須坂市仁礼では土石流が発生し、死者・行方不明者合わせて 10 人、流出家屋 12 戸という甚大な被害を出しました。

さらに松代町では、千曲川の水位が上がったために、支流の蛭川や神田川の水門を閉じなければ千曲川の水が流入してしまうことから、やむを得ない措置として水門が閉じられました（建設省千曲川工事事務所＝当時）。その結果、蛭川・神田川の水が行き場を失い、ついに住宅 230 戸が床上・床下浸水し、住民 900 人余りが避難する事態になりました。

屋根の上に避難した人たちを船やゴムボートで救助したり、千曲川の土手に水防用ポンプを並べて排水しましたが、千曲川の水位がなかなか下がらず、何日も水門を開けることができませんでした。堤防のかさ上げ、排水機の大型化、河川の掘り下げなど多くの課題が浮上しました。

翌 57 年 7 月下旬には、台風 10 号の接近と前線の活発化のため、東北信では 31 日夕刻からの雨で千曲川の水位が上がり、８月２日には上田市や更埴市（現千曲市）で前年の出水を上回りました。中野市立ヶ花では 34 年８月の洪水に次ぐ戦後２番目の高い水位となりました。犀川でも明科町（現安曇野市）・長野市小市で前年を上回るなどし、千曲川流域の被害は死者 4 人、全半壊・流失家屋 67 戸、床上・床下浸水家屋 1,464 戸にも及びました。

１カ月後の 9 月 12 日に上陸した台風 18 号で降雨記録を塗り替え、千曲川では中野市立ヶ花で戦後最高水位を記録し、堤防の護岸・根固（ねがため）が流失しました。支流の樽川（木島平村から飯山市を抜け千曲川に合流）では堤防が決壊し、流域に氾濫を引き起こしました。松代町でも支流の蛭川・神田川などの水門閉鎖に伴う浸水被害をもたらしました。県全体では死傷者 37 人、全半壊家屋 16 戸、床上・床下浸水家屋 5,236 戸にもなりました。

昭和 58 年 9 月、大型で強い台風 10 号と秋雨前線の活動により、千曲川・犀川流域では 27 日朝から雨が降り続き、翌日までに降った雨は、千曲川流域や犀川上流域で 200 ミリ以上となりました。また、28 日の一日降水量は長野市で 112 ミリに達するなど各地で記録的な豪雨となりました。河川の増水は続き、ついに千曲川の本堤防が飯山市戸狩で決壊し大災害になりました。

昭和 60 年 7 月 1 日に上陸した台風 6 号は再び大雨をもたらし、千曲川・犀川・梓川流域で被害が広がりました。松代町では神田川の堤防が決壊し、水門閉鎖による浸水被害が起こりました。毎年起こる水害に、「松代公民館報」は「災害は忘れる間もなくやってくる」という見出しで、町の水害の状況を詳しく報じています。この後、神田川などの河川改修が行われるとともに、排水機場が整備されて排水能力の高い排水ポンプを設置するなどの対策が実施されました。

昭和 58 年 9 月に起きた松代町の水害の様子。神田川が氾濫したため松代中学校から松代城跡・松代小学校周辺まで被害に遭った（昭和 58 年 9 月 29 日）

おわり